

氏名	関根 ひかり
ヨミガナ	セキネ ヒカリ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博美第657号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 日本の活版印刷における紙型の再発見とその考察－物質的文字の断片に対する視覚文化論的解釈 〈作品〉 文字の種 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	長谷部 浩
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	藤崎 圭一郎
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	鈴木 理策
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	八谷 和彦
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）

（論文内容の要旨）

本論は、日本の活版印刷における紙型を研究対象とし、二つの観点から考察する。一つは、印刷技術の発展の中でどのような役割を持ち、印刷に関わる人々にどのように捉えられてきたのかという点だ。もう一つは、現存する紙型、特に二次制作物の材料として転用された例について、視覚文化論の視点から解釈する。

紙型とは、活版印刷における鉛版刷りを行なうための鉛版を鋳造する紙の型である。これまで、活版印刷そのものや鉛の活字とは対象的に、紙型は十分な研究がなされてこなかった。

日本には16世紀末に活版印刷が伝わり、日本人によって日本語の平仮名、片仮名、欧文の活字が作られた。しかし、欧文と比べて、日本語は所要する文字の量が多い。そして、重く、場所を要するという理由から、組版を保存することができないため、再版の効率が悪い。このような理由から、1650年代以降は木版による製版印刷が主流となる。

その後、活版印刷は1870年に再び普及するまで200年以上の間、途絶えることとなる。

1876年に、日本で初めて紙型を用いた鉛版の鋳造がされる。紙型を用いることで、再版のために活字を組み直さなければならないという問題が解消された。そして、紙型の保管は重い鉛の組版とは比べ物にならないほど便利になった。日本の活版印刷の普及には紙型の存在が欠かせなかったといえる。

しかし、紙型は十分に研究対象とされてこなかっただけでなく、現存する実物も急速に姿を消しつつある。印刷会社であれば、著作権と同等の価値を持つ門外不出の財産として、外部に持ち出されることはなかった。だが、保管場所の問題もあり、廃棄が進んでいる。新聞社では活版印刷を行っていた当時から、毎日生産される新聞の印刷のための中間生成物として、日々廃棄されていた。よって、今も現存する紙型は限られている。

日本において活版印刷の歴史の中で重要な役割を果たしてきながらも、保管やアーカイブ化がされていない現状だ。また、印刷の過程で生まれる中間生成物に過ぎないという認識から、一義的な価値しか与

えられず、大系的な研究に繋がらない。

本論では、紙型について印刷文化の範囲でのみ考察するのではない。二次制作物の材料として様々な姿を変える例を中心に、断片的に残された紙型に定着する文字に注目し、視覚文化論の視点から考察する。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、活版印刷時代において、大量の印刷を可能にする技術として日本の新聞及び出版の文化を支えてきた「紙型」の歴史を俯瞰するとともに、紙型の二次利用のさまざまな事例を新聞や印刷会社への実地調査から探し出し、その物質性に着目し視覚文化論的側面から「紙型」を論じており、その着眼点は極めてユニークである。

著者は日本への活版印刷普及の背景に、欧米の技術を基礎にしながらも美濃紙などを使った日本独自の紙型開発があったことを明らかにし、その上で紙型が新聞社や出版社や印刷会社でどのような伝承・保管されているかを調査している。印刷における中間生成物という性格上、多くの使用済み紙型は破棄されており、こうした調査は紙型そのものの文化的価値の認知がまだ低い現状において喫緊のものとする。さらに著者は先行研究の詳細な調査を行い、技術的言及はあっても文化的側面からの紙型の研究自体が皆無であり、著者による紙型の物質性に着目して視覚文化的アプローチに論じる試みの新規性を明らかにする。

本論文の要は、紙型が印刷における本来の用途である中間生成物から切り離されて、別の用途——書籍の装幀や文箱など——に使用された二次制作物を論じる部分にある。活版印刷では、鉛に刻まれた活字が植物繊維でできた紙型に刻まれるという二重の物質性を通して、非物質的テキストが生成される。その過程のなかで生まれる紙型上のテキストは本来の意味を失いながらも手触りが生まれる。そして紙型の紙は物質でありながら意味から離れた浮遊するテキストを載せた物質として重力に抗う存在となる。著者は自ら見出した二次制作物にそうした姿を読み取り、その詩性を論じる。その観点は、著者の博士審査展出品に結実していくのは想像に難くない。本論文はあえて自作への言及をあえて避けているが、本研究自体、印刷文化の調査研究として意義の大きなものであり、その上で美術作家の制作の方向性を示されていることは高く評価してよいと考える。よって本論文は博士学位に相応するものと判断する。

(作品審査結果の要旨)

関根ひかりの論文「日本の活版印刷における紙型の再発見とその考察—物質的文字の断片に対する視覚文化論的解釈」は、活版印刷の工程で作られる紙型に注目し、印刷技術が発達する中で変化する位置づけと役割について解説し、さらに紙型を材料とした二次的製作物の文化的意味を考察している。中間生成物としてのみ認識するならば、活版印刷衰退後の紙型には役割が失われたかに思われるが、そこに造形物としての特異性と物質的な魅力を見出し、その可能性を拡張する論考である。時代の変化の中で消えゆく技術やものが数多くある現代において、不要とされたものが持つ歴史と意味を丁寧に考察しており、本論調査における経験は自作のインスタレーションに十分に反映されている。

再版効率を上げるために生み出された紙型のシステムは日本の活版印刷の普及において重要な役割を担うが、同時に使い捨てられるものとしての儚さがある。物質的な重みを持つ鉛の活字と対照的に、そこから生まれる紙型は活字の重さを痕跡として残しているが消耗品として扱われる。博士展で展示された作品は、古いガラスケースの中に活字を積み上げ、その上に活字の痕跡のある燃えかけた紙型を置いたインスタレーションである。鉛の活字は視覚的にも圧倒的な物質的重量を感じさせるが、その上に置かれた紙型に残る文字型の痕跡は、言葉が重力から解き放たれ、浮上していくプロセスが表現されている。言葉

は物質とは違う形で私たちの精神に働きかけ、空間を自由に行き来するが、文明は言葉を印刷という方法で物質的に固定化しようとしてきた。紙型を介在させることにより、技術を支える物や工程を含んだ印刷の歴史の姿を表す本作品は、技術が進歩する際にたびたび見失われるもの、つまり言葉と精神、文明と物質のあいだに存在するものへの示唆を含むものであり、その意味は大きい。

以上の理由から博士号に値すると判断した。

(総合審査結果の要旨)

十二月十五日、大学美術館で関根ひかりによる論文要旨の発表と質疑応答を行ったのち、主査、副査が、当該学生との口頭試問に対面で臨み、学生退出ののち、最終的な審査を総合的に行った。

・論文について

活版印刷の過程の中で、「紙型」というこれまで注目されてこなかった行程に着目し、単に消費財としてではなく、文化的な価値を認めたところがすぐれていた。また、紙型を管理してきた新聞社、出版社においても破棄が進んでおり、活版印刷を経験した社員、職人が次々と鬼籍に入る時期にあたり、貴重な証言を収集し、また、活版印刷が国内に入ってきた地、長崎などをフィールドワークを行い論文を充実したものとした。研究目的が、この失われていく物質に対する強い哀惜の念に支えられている。研究のための研究ではなく、強靱な動機に支えられた姿勢が、全体の水準を高めている。また、関連の文献に関しても、限られた論文等に直接当たり、分類整理を行うとともに、のちの研究者にとって有用なアーカイヴを巻末におさめ付録とした点も評価された。

・作品について

論文での調査、研究を踏まえて、インスタレーションとして作品発表を行った。論文の他に短い小説を自ら執筆し、職人に活字でくんでもらって、さらに「紙型」の再現を試みた。この執筆と物質化の過程を発展させて、博物館を思わせる硝子ケースに、周囲が焼け焦げた紙型と鉛活字を取めた。こうした作品化の根本にあるのは、第二次世界大戦の末期、東京を襲った大空襲で失われた紙型に対する哀惜である。また、さらにいえば、単に出版物に留まらず、戦火によって消尽された文化的な事物への哀惜へと繋がっている。

また、作品全体が、紙型の第二次制作物ともなっており、論文で収集した文箱などの制作物の系列に自作を置きたいという願いが感じられ高い評価を得た。

・総合判定

論文、作品ともに、学位にふさわしいだけの水準を備えている。また、論文、作品のどちらかに偏るのではなく、双方共に執筆および制作に時間と労力をそそぎこんでいく姿勢が高く評価出来る。そのため、主査・副査の全員一致で博士の学位を認める結論に達した。